

令和6年度 外国語活動・外国語科 研究のまとめ

榎原 朱梨・森澤 葉子・伊藤 美絵

1 外国語科本来の魅力に迫るための教師の資質能力について

(1) 外国語科が考える「教師の資質能力」の具体

まず、外国語科が考える教師の資質能力を規定する前に、英語科教師特有の資質能力としてこれまでの英語教育における先行研究で明らかになっているものをもとに整理した。石田ら(2011)は英語科教師に求められる資質能力として、「能力試験で測れる英語力」「英語教授に関する知識・国際理解教育に関する知識と教養」「授業で求められる資質能力」を挙げている。そのうち「能力試験で測れる英語力」と「英語教授・国際理解教育に関する知識と教養」については、授業には直接は結びつかないが、「授業で求められる資質能力」を支える資質能力であると述べている。また、卯城(2021)も、英語科教師に求められる専門性として(1)資格試験で測れる英語力だけでなく、指導者としての英語力も含めた「英語力」(2)英語科の授業を計画・実施・評価するという「英語科授業実践力」(3)英語そのものや異文化理解などといった「英語に関する専門的知識」の3つを挙げている。英語力については、卯城らも指摘しているように、資格試験で測られている英語力、つまり一般的な英語力以外にも、授業を行うにあたって児童や生徒の実態に即した英語力も求められると述べており、授業で求められる資質能力の一つと考える。以上のことを踏まえ、本校では「一般的な英語力」「授業で求められる資質能力」「英語教授・異文化に関する知識や教養」の3つを外国語科教師に求められる資質能力と捉えることとした。なお、「一般的な英語力」と「英語教授・異文化等に関する知識や教養」は授業に直接に関わるものではなく、「授業で求められる資質能力」を下支えするものと考えられる。これらの整理をもとに「授業で求められる資質能力」を「授業構想力」「授業実践力」「授業分析・評価力」の3つに分類し、先行研究および3年に渡る授業実践をもとに表1の通りまとめた。

表1 外国語科本来の魅力に迫るための教師の資質能力

資質能力	教科等が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	<ul style="list-style-type: none">・教科横断的な内容など児童や生徒の興味や関心を引き出すような目標の設定・児童や生徒の実態に合わせ、コミュニケーションの目的・場面・状況を意識した言語活動の設定・英語表現の定着に向けて、児童や生徒が異なる場面や機能で既習事項を活用する場の設定・児童や生徒同士が協同的に学び合うことができるような場の設定
授業実践力	<ul style="list-style-type: none">・児童や生徒の実態を考慮した英語使用・英語を用いてコミュニケーションを図るロールモデルとしての立ち振る舞い・安心してコミュニケーションを図れる雰囲気づくり・児童や生徒の発話を引き出すような英語での問いかけ・効果的な誤り訂正
授業分析・評価力	<ul style="list-style-type: none">・児童や生徒の授業中の姿や振り返り等に基づく省察や授業の改善・ルーブリックや振り返り等に基づいた形成的評価の実施

① 授業構想力について

授業構想力のうち、目標設定に関わって「教科横断的な内容など児童や生徒の興味や関心を引き出すような目標の設定」の資質能力を設定した。英語というものはあくまでも言語であるため、何かを達成するために言語を用いることが本来の役割である。コミュニケーション能力を育成することを主目的とする外国語科において、児童や生徒があらゆる他者とコミュニケーションを図る上で、コミュニケーションを図りたいという意欲や、伝える内容を思考することがあって成り立つものである。他教科等での知識を繋げることで児童や生徒の思考が伴うような活動になるとともに、意欲的に活動に取り組む姿につながることで授業実践から明らかになった。また、コミュニケーションの相手が世界に広がるにつれ、児童や生徒の動機付けや取り組みへの集中力が変化するという考え方（藤原，2020）がある。そのため、教師には「児童や生徒の実態に合わせ、コミュニケーションの目的・場面・状況を意識した言語活動」の設定が求められる。実践を通して姉妹校との言語活動を行うことで、児童や生徒が相手意識をもって意欲的に取り組む姿が見られた。

さらに、言語活動場面において「英語表現の定着に向けて、児童や生徒が異なる場面や機能で既習事項を活用する場の設定」や「児童や生徒同士が協同的に学び合うことができるような場の設定」を意図的に構想することで、児童に限られた英語で表現しようとする過程を通して、日本語で相手によりよく伝えるにはどうしたらよいかと考えたり、自分や他者と話し合ったりするといった姿があり、日本語と英語の往還をしながら深めていくことができる学びになることが明らかになった。

② 授業実践力について

授業実践力に含まれる資質能力として「児童や生徒の実態を考慮した英語使用」「安心してコミュニケーションを図れる雰囲気づくり」を設定した。英語は、児童や生徒にとっては未知の言語であるがゆえ、特に発表などのスピーキング活動における不安は大きくなることが想定される。間違えても大丈夫であるという雰囲気づくりが、児童や生徒の英語での発話を下支えする。同時に、児童や生徒の実態を考慮し、教師が英語を使用することで児童や生徒が内容を理解した上で取り組むことに繋がり、安心して活動に参加することが可能となるだろう。また、教師によって児童や生徒が理解可能なインプットを与え続けることは、言語習得において欠かせないといえる。

第2に、「英語を用いてコミュニケーションを図るロールモデルとしての立ち振る舞い」については、特に小学校においては学級担任が指導者となることが多いため、児童にとって身近な存在である教師がALTや外国の方と英語を使ってやりとりをする姿を見せることが、同じ英語学習者としてのロールモデルになり、児童や生徒の動機付けとなると考える。小学校の授業実践においては、児童と同じように教師がまず英語を楽しむ姿を見せることで、児童の英語への抵抗感を減らすことができている。

第3に、「効果的な誤り訂正」について述べる。外国語科教員として英語に関する知識や技能をもとに、児童や生徒の発話に対して適切なフィードバックを与えることで、児童や生徒の気づきを促される。教師が適切な方法での誤り訂正を行うことで、児童や生徒自身の気づきを促すとともに、児童や生徒同士での誤り訂正につながることで授業実践から明らかになった。

③ 授業分析・評価力について

授業分析・評価力の資質能力としては、「児童や生徒の授業中の姿や振り返り等に基づく省察や授業の改善」と「ルーブリックや振り返り等に基づいた形成的評価の実施」を設定した。

(2) 外国語科の特性に応じた見取りの方法について

本研究においても、授業構想を行う際にはバックワードデザイン（逆向き設計論）に基づき、授業を開発した。さらに、本校外国語科部が考える「外国語科本来の魅力」を踏まえた単元目標を設定し、言語活動におけるルーブリックを作成した。ルーブリックを活用しながら、発達段階や領域に応じて児童や生徒のパフォーマンスを見取った。中学校2年生の授業では、生徒がより主体的に活動できるように、目標に応じたルーブリックを学級で話し合っって作成した。表現方法と表現内容のルーブリックを作成し、それを元に自分や友達の意見に対してフィードバックを行いながら、より適切な表現や内容になるように自己調整していく姿を見取った。中学校3年生の授業では、単元の最後の問いに向かう思考の流れをわかりやすくするために、OPPを活用した。一つ一つの問いの答えを英語で書き、グループで交流することを通して、表現力を高めていく姿を見取った。小学校では、音声を中心に学習を進めているため、児童のパフォーマンス動画や振り返り、授業中の発話記録などを中心に児童の姿を見取った。

(3) 授業公開で見取った児童や生徒の姿の例

資質能力	児童や生徒の姿	手立て
授業構想力	児童や生徒が、言語活動に意欲的に取り組むとともに、他者の考えに興味をもったり、共感したりする姿が見られた。	・姉妹校や特別支援学級生徒となど、多様な他者とコミュニケーションを図れるような場面設定を行った。
	1時間を通してどの児童も積極的に英語を使う姿が見られた。	・多様な活動形態で発話を促すことで、英語での発話の量と質の向上に繋がった。 ・身体表現を伴う歌などを適宜取り入れた。
	本単元のターゲットセンテンスだけでなく、既習事項を用いてその場で質問を考え、やりとりする姿が見られた。	・言語活動の目的や本時のめあてに立ち返ることで、児童の思考を促し、次の活動への必要性を引き出した。 ・教科横断的な内容など児童の答えたくなるような場面設定を行った。
授業実践力	発音や表現の訂正を行ったり表現を引き出したりするなど、コミュニケーションをよりよくするために教え合う姿が見られた。	・暗示的な誤り訂正だけでなく、明示的な誤り訂正を取り入れた。 ・やり取りの良いところを見つける活動を行うことで、児童同士で教え合う等のコミュニケーションの質の向上に繋がった。
	既習表現を使って表現できるように試行錯誤する姿が見られた。グループを超えて協働的に学びあう姿が見られた。	・簡単な日本語に変換することで、自分の言葉で表現するように指導した。 ・表現できなかったものを全体で共有し、

		よりシンプルな表現での言い換えを促したりした。
授業分析・ 評価力	振り返りから本単元で学習する表現に留まらず、既習事項を活用しやりとりする良さや本当に伝えたいことを伝えるために必要な英語表現を学びたいという思いが明らかになった。	・本単元の自身の振り返りととどまらず、異文化理解やオーセンティックなコミュニケーションを通して学べることに気づける振り返りを行った

2 研究の成果と課題

成 果	<p>○授業実践を通し、児童や生徒が教科等本来の魅力に迫るための外国語科における教師の資質能力を明らかにすることができた。</p> <p>○児童や生徒が自分の思いや考えを英語で表現する力を育成していくには、既習事項を活用することができる場を教師が意図的に設定し、異なる場面や機能で表現に出合うことができるようにしたり、児童や生徒がうまく表現できないことを簡単に言い換える練習の場を設定したりするといった授業構想力や授業実践力が必要であると明らかになった。また、教師がそのような授業構想力・授業実践力を働かせることで、児童や生徒の伝えたいことを伝えられるようになりたいという英語学習への意欲向上につながると分かった。</p> <p>○児童や生徒の活動のターニングポイントを見極めた授業づくりを行うことで、主体的・対話的・協働的な活動となり、意見や考えをより深めながら学び合う姿が見られた。</p>
課 題	<p>●児童や生徒が表現したい内容を既習事項に置き換えて表現できるようになるために効果的な活動を引き続き検討していく必要がある。</p> <p>●英語で書かれた文章を、単語の意味がすべて分からなくも意味を推測しながら読み進める力がまだ十分に身につけているとは言えない。前後の既知の単語から未知の単語の意味を推測し読み進めることができるようになるための具体的な手立てを検討していく必要がある。</p>